

## 日本の一番長い三月

松田妙子

こんなに長い三月は初めてです。東日本大震災から一週間以上は、ただ茫然としていました。西日本の私たちは平常心が大事だ、普通に仕事をしなければ、と思っても、こんな深刻な危機を笑いなど、できるはずありません。別のテーマで描こうにも、私の頭は震災で一杯だし、自分が笑えないのに人に笑いを提供できるはずもない。そういう状況でした。

弟が自殺した直後も、「とてもこんな時に笑える漫画なんか描けない」と思いました。それでもメ切は来るので描いて出したら、「今度の漫画は面白いですね」と編集長に言われました。それで私は、「どんなに打ちのめされていても、それを笑い飛ばすもう一人の私がいる」と、自信がついたものです。ただしそれは身内の死という、ごく個人的な出来事でした。今回は日本人、いや地球人全体の試練かと思えるほどの大災害。両親がそれぞれ、命に関わる事態で別々の病院に入院しているという、「個人的な出来事」も吹き飛んでしまいそうなほど、私は、連日の恐ろしいニュースに打ちのめされていました。

そんな中では、私の周囲で反原発を叫ぶ人々のパワーに、違和感も覚ええました。一人が「日本人の礼儀正しさが海外で評判になっていると聞くと、すごく腹が立つ」と言えばわつと同調し、「みんなもつと怒ってもいいはずだ。政府や東電に対して、暴動を起こしてもいいはずだ！」と氣勢を上げる人々。なぜこの人たちは、何かというと「怒り」を口にするのだろう、と思いました。本当に打ちのめされた人には、怒りなど感じている余裕もないのではないか？

私だって阪神淡路大震災を激震地で体験し、給水車や救援物資の配布を、皆が長い列を作ってじっと待っているのを見てきまし

た。それが当たり前だったと思っていました。それが外国人の目には称讃に値するらしいことを、今回の震災報道で初めて知りました。それはとても切ないけれども、希望の種のように思えたのです。

私はずっと、自分が日本人であることに、後ろめたさを感じてきました。アジアを侵略した日本、その償いもしない日本、差別も解消できない日本。その国民であることに、誇りなど持てませんでした。でも今、日の丸・君が代の強制などの「愛国心の押しつけ」ではなく、自然発生的に「日本人の誇り」が生まれつつあるのではないか、という気がしたので。この国に生まれ、この国と共にあることへの、切ないまでのおしき。

昔観た「日本沈没」の映画のラストシーンを思い出します。日本列島という祖国を失い、大陸をさすらう日本人の姿。それが現実になることもありうる。例えば原発事故が最悪の結果をもたらして、日本には誰も住めなくなったとすれば、日本人は祖国を失った流浪の民として、世界中に散らねばならなくなるかもしれない……。

そう思うと、朝鮮学校の高校の無償化を求める訴えなども、今までとは違った思いで聞いている自分を感じました。これまでは日本に住む日本人として、マジョリティとして、マイノリティである在日朝鮮人を「支援」しなければ、と思ってきました。でも、遠く異郷にあって祖国を思い、民族の誇りを保持しようとする在日の人々の姿は、近い将来の、日本人すべての姿であるかもしれない。日本人であること自体が、マイノリティである日が来るかもしれない、と思う私。

タイタニック号が沈没してゆく中を、最後まで演奏を続けたという船上の楽団のことも思い出しました。自分が死ぬのはもう少し先かと思っていたけれど、案外近いのかもしれない。いつその

時が来て、私はそんな風に生きることができただろうか、と。  
 そんな中でやっと描いた漫画です。「社会派漫画家」としては、  
 東日本大震災に触れないわけにはいかず、それでいて重たくなり  
 すぎず、見た人に明るい気分になってもらえるような漫画を描く  
 のは、至難の業  
 でした。成功し  
 ているとは言  
 い難いけど、出  
 来不出来が問  
 題ではない。と  
 にかくこの状  
 況で漫画が描  
 けたことが大  
 事なのだと思  
 っています。

漫画家とし  
 ての私に、精一  
 杯のことはや  
 っている。阪  
 神淡路大震災  
 の時、瓦礫の街  
 で、わずかな物  
 を並べているお  
 店がありました。  
 品物の質や量よ  
 り、そこで店を  
 営業しているこ  
 とが大事でした。  
 「日常」を取り

戻す動きが始まっていると、人々に伝えるため。私が三月下旬に  
 描いた漫画も、そういう意味のものだと思っております。

2011、4、1、9PM\*



2011、3、23、8:30PM\*